(8) ×来」　(180)×12×1　019　第一一二号
(9) 「□□」　(203)×19×1.5　019　第一一三号
(10) 「□」　(120)×15×1　019　第一一四号
(11) □□　(208)×14×1　081　第一一五号
(12) □□　(114)×11×1　081　第一一六号
(13) □　(123)×13×1　081　第一一七号

荒井猫田遺跡から出土した木簡は、今回出土した一三点を含めて計六三点に達する。

木簡の形状は、幅の狭い長方形で上端部を圭頭状にし、下端部を尖らせたものが多く、切り込みのあるのは第一三次調査で出土した第一号（本号の釈文と訂正と追加(1)）と第三八号（同(29)）の二点だけである。ともに町跡地区のもので、館B地区からは出土していない。判読できたものには、𑖪（バン）と大日如来を組み合わせたものが多く、梵字で金剛界大日如来と胎蔵界大日如来真言を組み合わせたものが少数認められる。

（押山雄三）

宮城・中野高柳（なかのたかやなぎ）遺跡

1 所在地　宮城県仙台市宮城野区中野字高柳
2 調査期間　二〇〇〇年（平12）七月～九月
3 発掘機関　宮城県教育委員会
4 調査担当者　佐藤則之・佐久間光平・須田良平・高橋栄一・引地弘行・稲毛英則
5 遺跡の種類　屋敷跡
6 遺跡の年代　平安時代～中世
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

中野高柳遺跡は七北田川左岸の標高三～四mの自然堤防上に立地している。仙台港背後地土地区画整理事業に伴い、一九九四・九五年には宮城県教育委員会、一九九五～九七・九九年には仙台市教育委員会による発掘調査が実施された。

二〇〇〇年度の調査は、遺跡の北部約三〇〇〇m^2を

対象に行ない、方形の堀に囲まれた中世の屋敷跡が発見された。屋敷跡は二時期あり、規模は、古段階で東西五五～六〇ｍ南北六〇ｍ以上、新段階で東西二五～三〇ｍ南北四〇ｍである。屋敷内からは掘立柱建物群・井戸・溝・土坑などが検出されている。出土した遺物には陶器、石製品（石臼・砥石など）、木製品（柄杓など）がある。

木簡は古段階の屋敷跡の南側を区画する幅一・五～二・〇ｍの堀から出土した。年代は伴出遺物が少ないため、新段階の屋敷跡の年代である一六世紀以前という以上の限定はできない。

8　木簡の釈文・内容

(1)　(101)×27×1　081

。□□施主

細かく割れた状態で出土しており、接合の結果、右記の釈文が復原できた。語句の内容からみて、塔婆の断片の可能性などが考えられる。

（1～7　高橋栄一、8　吉野　武）

宮城・洞ノ口遺跡

1　所在地　仙台市宮城野区岩切字洞ノ口東

2　調査期間　第四次調査　二〇〇〇年（平12）四月～一二月

3　発掘機関　仙台市教育委員会

4　調査担当者　平間亮輔・吉田和正・森　剛男

5　遺跡の種類　水田跡・中世城館跡

6　遺跡の年代　古代～近世

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

洞ノ口遺跡は、七北田川の北岸にある自然堤防から後背湿地にかけて立地しており、一九九二年から発掘調査を行なっている。これまでの調査で、遺跡の北から東側にかけての低地部分では、平安時代前半から近世にかけての水田跡を確認しており、南西側の微高地部分では、中世後期（戦国期頃）の城館に伴う外堀や土塁も検出している。また城館検出面の下層からは、